

令和7年度 第1回中原区地域福祉計画推進検討会議 摘録

1 日時：令和7年8月19日（火）15時00分～17時00分

2 開催場所：中原区役所5階 505会議室

3 出席者

（1）委員

後藤 純（東海大学工学部特任准教授）※座長
大泉 浩（中原区社会福祉協議会常任委員会委員）
上原 浩一（ひらまの里地域包括支援センターセンター長）
保坂 幸江（中原区民生委員児童委員協議会常任理事）
西 智弘（くらしの保健室（一般財団法人プラスケア）理事長）
石井 秀和（コミュニティカフェ新城テラスオーナー）
安西 卷子（こども食堂まきまきキッチン主催者）
宇賀神 はな子（ポーラスター代表者）
大平 暁（生活介護事業NPO法人studioFLAT理事長）
【欠席】松川 正二郎（中原区町内会連絡協議会会長）

（2）事務局

地域みまもり支援センター川島所長、地域みまもり支援センター塚本副所長、まちづくり推進今村部長（副区長）、危機管理担当倉又課長、企画課斎藤課長、地域振興課並木課長、生涯学習支援担当福田課長、地域支援課梅澤課長、高齢・障害課堺課長、衛生課川辺課長、中原区社会福祉協議会山本課長、地域ケア推進課 田中課長、企画画調整係星野係長、藤本職員、木村職員

4 次第

（1）開会

資料確認、区長挨拶、委員自己紹介、座長選任

（2）議題

- ア 第7期中原区地域福祉計画の取組の進捗及び令和6年度の評価について
- イ 高齢者のつながりづくりについて
- ウ その他

（3）閉会

5 公開・非公開の別 公開

6 傍聴者 なし

【配布資料】

次第

- 説明資料1 第7期中原区地域福祉計画令和6年度計画と実施結果、令和7年度計画一覧
- 説明資料2 第7期中原区地域福祉計画 令和6年度評価
- 説明資料3 つながりづくりについて
- 参考資料1 中原区地域福祉計画推進検討会議 委員名簿・事務局名簿
- 参考資料2 中原区地域福祉計画推進検討会議開催運営等要綱
- 参考資料3 第7期中原区地域福祉計画

7 議事摘録

開会

発言者等	発言要旨
一	<p>地域ケア推進課田中課長の司会により開会。傍聴者なし。</p> <p>配布資料確認後、区長挨拶を行い、各委員から改めて1分程度で自己紹介。</p> <p>その後、座長を後藤委員にお願いし、会議録の記載形式（要約方式）、今回の会議録の確認者（安西委員と石井委員）を確認した後に議題に移る。</p>
後藤委員	<p>それでは議題1の説明をお願いします。</p>
星野係長	<p>議題1【説明資料1 第7期中原区地域福祉計画取組状況一覧】について、</p> <p>かいつまんで各課から取組を簡単に説明させていただきます。</p> <p>※以降の番号は、【説明資料1】における取組の番号を指す。</p>
田中課長	<p>地域ケア推進課です。説明資料1の説明に入る前ですが、前回2月の会議で皆様からご意見がありました個人情報の取り扱いについて、健康福祉局地域包括ケア推進室に確認ができたことを一旦ご説明報告させていただきます。個人情報保護法第27条により、個人情報を第三者に提供するには本人の同意を得ることが原則となっており、法令に基づく場合や生命身体財産保護のために必要があり、本人同意を得ることが困難な場合には提供可能と定められております。法令に基づく場合（本人同意が不要）とは、例として虐待防止法に基づく対応や介護保険法における地域ケア会議での本人の支援に必要な検討等が挙げられます。情報を提供する相手方としては、民生委員・児童委員は特別職非常勤公務員であり、法律上守秘義務も課せられているため、活動に必要な範囲内で提供が可能です。また、地域包括支援センターにつきましては、委託関係を結んでおり、介護保険法上地域支援事業に位置付けられているため、委託契約の目的の範囲内で情報提供が可能です。生活支援コーディネーターについては、現段階では確認が必要な状況と聞いております。現状で確認できたことは以上ですが、一般論のようになってしまっており、前回の議論の答えとしては物足りなさを感じますが、報告させていただきました。続報がございましたら次回以降にもご報告させていただきたいと思っております。</p>
後藤委員	<p>この件に関して、法学法律論で言えば、まずそもそも日本国憲法の議論ですが、コミュニティとか共同体や国家というものが個人の権利を侵害するから憲法を作ったわけですので、法学の世界には共同体とか地域コミュニティが頑張るといった概念はないわけです。経済学もそうです。行動経済学のナッジなども一時流行りましたが、結局個人は合理的な行動をするから個人にどう働きかけるかという話であって、共同体をどうするかという話ではないのです。社会学もそうです。そういう意味ではまだ「共に口を出してはいけない」というのが、やはり日本の基本的な法律とか行政のロジックだと思います。</p> <p>それに対して、川崎市としては、新しいコミュニティ政策を考えて、どうやって口を出していいだろうかと考えて、ソーシャルデザインセンターだとかまちのひろばだとか色々なものを考えたのだと思います。おそらくそちらの方でも、共同体という、コミュニティとか地域の繋がりというものに、ある程度の個人情報提供は自治の中で許していくべきなのではないかという議論をやっていたかかないといけないのだろうなと思っています。そのぐらい、共同体へ政府、行政側が口を出すとすることはばかられることで、自治会町内会に情報を手渡すなんてことは許されないというのが、近代憲法の原則みたいな話だと思います。けれどね、そう言ったって目の前に困っている人もいて、声をかけてどうしようという話が宙に浮いてしまっている。</p> <p>この個人情報保護法について部署としてはどこが答える内容になるのでしょうか。地域福</p>

発言者等	発言要旨
	<p>祉として考えるとある程度基準を変えてもらわなきゃ困るものだと思います。そもそも地域福祉計画を見れば、地域包括ケアシステムというのは総合計画の下に位置づいていて、色々な計画のちょっと上位概念にあると思っています。そういう意味では、こういう議論がありますよということを、何かやり取りしているのですか。</p>
田中課長	<p>今回、見解を伺ったのは、健康福祉局地域包括ケア推進室ですが、個人情報所の所管部署で見ますと行政情報課になります。</p>
後藤委員	<p>今回お話しされた見解は、委員の中で分かっている話だと思います。誰と誰が話し合うことで、現状の世界が5年、10年先に前に進みそうなのかといったことを聞きたいのではないかと思います。</p>
田中課長	<p>もう少し踏み込んだ答えがないか、担当部署を聞いているのですが、なかなか答えがないといった方がよろしいでしょうか。また、続報がございましたらこの会議の方でご報告させていただきたいと思っております。</p>
後藤委員	<p>ありがとうございます。引き続き、本題に戻っていただければと思います。</p>
田中課長	<p>それでは議題に戻りまして、説明資料1をご覧ください。 それぞれの課から令和6年度の実施結果や今年度の取り組みについて、ご説明をさせていただければと思っております。</p> <p>53番 身近な相談相手として住民を支える「民生委員児童委員の活動支援」 63番 活気ある中原区へ「区内事業者と連携した地域づくりの推進」 について説明。</p>
梅澤課長	<p>14番 「健康づくりや介護予防に係るボランティアの支援」 16番 「認知症サポーターの養成」で認知症の方の安心できる生活を支援 28番 「こんにちは赤ちゃん訪問事業」で安心して子育てできる地域づくり 37番 「中原区子どもの発達支援事業」で安心して生活できる地域へ について説明。</p>
並木課長	<p>3番 さまざまな「スポーツ活動」で地域交流の活性化 52番 「商店街と連携した地域のまちづくり推進事業」で地域の活性化推進 70番 気軽に集い、つながりをつくる「中原区民交流センターの運営」 について説明。</p>
堺課長	<p>46番 いつまでも生活が続けられるように連携した「ひとり暮らし等高齢者見守り事業」</p>
福田課長	<p>18番 「家庭教育推進事業」で子どもを豊かに育む地域社会の創造 20番 「社会参加・共生推進学習」で外国人市民の暮らしを支援 69番 とともに生きる地域社会へ「障害者社会参加学習活動ヤングジャンプセミナー」 について説明。</p>
星野係長	<p>続けて説明資料2に基づき、 令和6年度の中原区地域福祉計画では、5つの重点的な取り組みに対し概ね達成「評価3」と評価し、主な取組を次のとおり説明。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子育てサロンは参加者数が増加し、地域交流を促進。 ・認知症支援サポーター養成やチームオレンジを区内で初めて認定。 ・情報提供では、「どう？ご近所さんぽ」や防災マップの更新を通じて地域活動を支援。 ・包括的な相談支援機能の充実では、区役所の全ての部署で現場に赴くGOTO現場の取組をきっかけに区役所としての支援機能、連携を強化。GOTO現場を起点とする地域活動マップ「ナカログ」で見える化も実施。

発言者等	発言要旨
	<p>・地域コミュニティ推進では、交流会や名刺交換会を通じて多様な団体の連携を促進。全体として継続事業の改善と新規事業の展開により、地域包括ケアシステムの推進に寄与した、旨を説明。</p>
後藤委員	<p>今の説明を受けて、何か質問はありますか。</p>
安西委員	<p>先ほどのお話にあった「ナカログ」は初耳でした。こういった情報をどこに出しているのかわからない。良い取組と思ったので、もっと幅広く伝えていって欲しいと思います。</p>
星野係長	<p>「ナカログ」については、今年3月に始めたものです。周知が行き届いていないところは、これから考えなければいけないと思っています。そのためにも、情報をより出していくことと、更新し、新しい情報を見せるのは必要だと思いますので、できるだけ皆様に幅広く行き届くよう処してまいりたいと思います。</p>
後藤委員	<p>その他の方がいいでしょうか。</p>
宇賀神委員	<p>46番と53番なのですが、46番の「ひとり暮らし等高齢者見守り事業」のアンケート調査、また53番の「民生委員児童委員の活動支援」、どちらも民生委員さんが当事者の方と関わっている事業だと思います。その個人情報保護というところで、集まった情報の中で、たくさんの課題が出てくると思うのですが、その課題に対してどこがその課題を対応していくのか、相談を受け、その次へ繋がる流れってあるのですか。次の課題を解決するためのアクションがどうなっているのか、地域で動く活動者側として、もう少し地域資源として活用してもらいたい気持ちがあるので、この流れがストップしないような工夫があれば知りたいです。また行政側でストップしないために行っていること等あれば伺いたいです。</p>
堺課長	<p>46番「ひとり暮らし等高齢者見守り事業」について、調査票自体に個人情報の関係取り扱いに関して記載しており、提出された情報については、基本的に目的外には使わないが、民生委員や包括支援センターと共有するといった内容の文章を入れています。そのようにして、支援機関との情報連携が取れるような形にしています。また、民生委員が実際に訪問する中で普段地域の方と接する機会がない方についても、これを機に、ご家庭を訪問することによってその方の情報も拾えるような形になりますので、その中で心配な方がいれば、介護サービスに繋いだり、地域包括支援センターに繋いだりというような形で支援に繋ぐなど、そのような活用方法を取っています。</p>
田中課長	<p>53番「民生委員児童委員の活動支援」については、個人情報というよりも、地域のリソースや課題、理想の地域像、民生児童委員活動のやりがいや喜びなど、様々な地域の情報を集約し、今後の活動に活かしていくものになり、情報共有のためにやっているところです。</p>
宇賀神委員	<p>私は、高齢者を中心に活動しているのですが、活動に来てくれている高齢者の方の家族が、難病になってしまったが年齢的に若く、包括では扱えなかったことがあります。そういう制度の狭間にいる方は、どこに相談するのがよいか、どう対応しているのか教えていただきたいです。相談を受けた時に民間のサービス等も含めて地域資源として活用していきたいので、色々な地域資源を育てるという意味でも知れたらうれしいです。</p>
梅澤課長	<p>地域支援課の方では、地域包括ケアシステムを推進している中で、子どもからお年寄りまで全世代を対象にしています。今回の相談は区役所の中だと地域支援課での対応になると認識しております。相談いただければ、支援課は、社会福祉士、社会福祉職、心理職等の専門職のチームになりますので、話を聞きながら、どこに繋げていったらいいのか、どういう資源があるのか、一緒に探りながら支援ができると思っています。</p>
後藤委員	<p>皆様ほかに意見はありますか。私は、やはり「GOTO 現場」が面白いなと思いました。いい取り組みです。コミュニティと付き合う時に、コミュニティをまとめるかまとめない</p>

発言者等	発言要旨
	<p>かという議論があるが、まとめてうまく付き合っていくやり方もあれば、まとめずに政策ごとに必要な現場に行き、キーパーソンを直接行政が見つけてくるという、2つのやり方があります。現状まとめるやり方は大変です。それゆえに、直接行くという方向で色々見えてきたものがあるのだらうと思います。こぜひ引き続き現場に行って、気づきを持ち戻ってくるというのをやってほしいです。</p> <p>また、事業の達成度について、なぜ一つも「2」にならなかったのでしょうか。例えば「地域で活躍する仲間を増やす」について、とても取り組んでいるように感じます。なぜ「2」なのでしょう。</p>
星野係長	<p>後藤委員も今お話しいただいた通り「GOTO 現場」の取り組みなどもやらせていただいたのですが、明確に「こう良くなったよね」というところが、出てない中で、目標を上回って達成と言えるかというところで「3」という評価にさせていただいております。</p>
川島所長	<p>地域包括ケアシステムとはこの推進や構築に目標値がないところが悩ましいところです。委員の方々が「ここを『2』にしてもいいのでは」というご推薦がございましたら、考えさせていただきます。職員はそれぞれ各課職務上の中で、地域包括ケアシステムを推進するために力を合わせながらやっておりますので、市民の方や代表の方から見ていただいてご意見ございましたら、それを受け、再度検討させていただきたいと思います。</p>
後藤委員	<p>では、議題2の「高齢者のつながりづくりについて」について、事務局から説明をお願いしたいと思います。</p>
星野係長	<p>議題2について、各委員から事前にお伺いしたキーワードもきっかけとして「見守りの関係性の構築や持続可能なつながりづくりの場の実現を行うために必要だと思うこと」を伺いたい旨、説明。</p>
後藤委員	<p>では保坂委員から順にお話いただきたいとおもいます。</p>
保坂委員	<p>民生委員の立場になるのですが、包括や町内会、民生委員が集まった情報交換の場が以前はあったのですが最近は少なく、年に1回か2回、大きい範囲で開催しています。そういう場での情報交換が大事だと思っています。私の担当エリアは比較的小さく、道で会ったりすると挨拶したり、話したり、お互いに顔が見える関係性が強く、すごくいいことだと思っています。以前、2、3日前に話した方が一人で亡くなっていたことがあります。それはたまたまお隣の方が「今日は天窓が開かないからおかしい」ということで気がつき、すぐ覗きに行ったことですぐ分かったのです。高齢者はそういうことも多いと思うので、やはり地域の横の繋がりが一番大切だと思っています。</p>
後藤委員	<p>ありがとうございます。今の保坂さんの意見に近い方はいらっしゃいますか。</p>
安西委員	<p>私は多様な居場所と、もっと近くに小さな場所と書きました。現在、いこいの家は、中学校区に1つあると思いますが、年齢が進むにつれお年寄り、そこまで行くのが遠く感じたりすると思います。うちの父もですが、頑固になり好き嫌いが激しくなることもあると思います。いこいの家単位ではなく、より小さな単位で、それこそ自宅で近所の気の合う人たちで集まって話すみたいな場所があったり、昔でいうお茶飲み会をするというようなことがあればよいなと思います。以前、父からそういう場所をやりたいけどやり方がわからないと相談はされたことがあり、町内に何か所かそういうことをやってくれる家があったら地域としてもすごく良くなるのではと思います。</p>
後藤委員	<p>上原委員の意見も近く感じますがいかがでしょうか。</p>
上原委員	<p>きっかけ作りと書きましたが、今までの取組みとして関わり続けてきているのが民生委員さんとケアマネージャーさん、介護保険事業者だけではなくて、その地域で活動している色々</p>

発言者等	発言要旨
	<p>な団体の方々がいらっしゃると思っています。そういった部分の繋がりを今後どう生かしていくのか考えている所です。今年に関しては、きっかけの部分で、どんな情報をケアマネージャーさんや民生委員さんが持っているのか。例えば相談を受けた際に「こんなところあるよ」という些細な一言で、楽しめる場所に巡り合えるかもしれない。というようなところで、今回9月に圏域会議で、民間団体さんなど、介護保険以外の部分の方に集まっていただいて、ケアマネージャーさんや民生委員さんに、介護保険だけではない地域サービスを知識として少しでも持っていただけたらと思い、地域の活動情報を皆さんに伝えるような場所を設けました。民生委員さんなんかは、地域の第一線で活動される方々なので、そういったものを伝える中継地点みたいな形でやっていただけたらと思っています。引きこもりがちになってしまった方々を引っ張り出すために、どういうことをやっていけばいいのか、考えながら進めているところなのです。そういうような地域活動やられている団体さんをより周知させていただく中で、もう少し地域に変化があるかなと思って今動いているところです。</p>
後藤委員	<p>この流れで石井さんの意見をお聞きしたいと思うのですが、いかがでしょうか。</p>
石井委員	<p>わたしは、「コミュニティに頼った繋がり作りだけでは不十分、籠りがちになってしまう方の状態把握の手段を考える」という言葉をあげさせていただきました。</p> <p>前提としてコミュニティ作りをやっている立場なので、今の意見を否定するつもりは全く無く、人をつなげることで、大多数の課題は解決するのではと思っている側の人間だということを前提で聞いていただければと思います。</p> <p>大家としての立場が私にあるのですが、一人暮らしの男性の方もお客さんでいらっしゃり、完全に閉じこもってしまっていて出てこないとなるとやはり心配です。色々なサービス使ってアプローチもしますが、「関わってほしくない」という人がいるのも事実だと思います。この方々をコミュニティに引きずり出そうとしても難しいという現状があると思っています。区役所の46番の「ひとり暮らし等高齢者見守り事業」をしていることを勉強不足で全然知らず、少しそのようなものがあることを安堵しています。どうしても出てこない方に関しては、少し強制的にでも調査する必要はあるのだと思います。書かせていただいたのは、連絡が取れないような、本当に出てこない人たちに向けて、状況把握の方法を考えていくべきというところです。</p>
後藤委員	<p>閉じこもっている高齢者のなかで認知症気味や栄養不足の方もいると思います。若い時から出不精ということではなく、それなりにフレイルが進んでいる状態なのだと思います。地域の方の見守りだけでなく、包括の力など必要なのだと思います。包括の方からのご意見いかがでしょうか。</p>
上原委員	<p>外に自分で出られる方は、相談できる方に困っていない方が多いと思います。やはり、ご本人からのアプローチが全くできない方やそもそもの性格的な問題であるとか、コミュニティを失った状態が継続しているとかそういう方にはフォローが必要だと思います。ただ必要ないとご本人自身が感じている場合、こちらとして無理に何かを強制はできないと思います。本人に合うものが紹介できるのかといったところもありますし、ある意味マッチングだと思うので、そういう部分も気かけながら取り組んでいきたいです。</p>
後藤委員	<p>この流れで、大泉委員から「場を知ってもらったちょっとした工夫」についてご意見をいただきたいです。</p>
大泉委員	<p>日頃の活動をみていると、女の方は比較的外出やコミュニケーションする傾向があるものの、男の方は家から出ない方が多い。町内会の中で、奥さんに旦那さんは元気か聞いて、元気だと答えてはくれるものの、実際には会えないことが多い。町内会は色々行事をやったり</p>

発言者等	発言要旨
	はするが、もう少し男女ともに活動できるような雰囲気はどうしたら作れるのか悩んでいます。
後藤委員	ありがとうございます。やはり、男の人で言うと奥さんがキーパーソンという人が多いと思います。家ではしっかり話を聞いてくれる奥さんがいるが、外だとそうはいかない。自分を語れるような機会や場があれば出ていく人も多いただろうけど、なんとなく一観客になってしまう場の方が多いのではと思います。
石井委員	以前イベントで、60代前半～中盤の方で、若い頃に色々な交友関係ができたにも関わらず、社会人で会社と家庭を行き来しかしておらず、定年してみたら家庭以外に居場所はなかったと言っていた方がいました。「色々なことをやりたいが、今から出ていくのは怖い」と言っていて、そこに同席した60代中盤の女性も「うちの旦那も一緒」と言っていました。その時に社会の問題なのかと感じました。一人一人としては人と繋がるのが嫌いではないのだと思います。その世代が予備軍だとすると、70代になって体が動けなくなった人たちも当然そうなのですが、自分一人で時間を過ごせる50代、40代世代はさらに孤立していくのではという危惧があります。今の高齢者だけでなく、その下の世代も地域に関係を持たせることを施策として打たないといけないのだと思います。その世代を地域につなげていくことで、高齢者も結果として地域に出ていきやすくなることにつながる可能性も大いにあると思います。
後藤委員	ありがとうございます。続きまして安西委員お願いします。
安西委員	今の意見から、SDCの中に、高校生で自分の叔父が引きこもってしまっていて、社会復帰させたい思いで動いてくれている子がいます。こういった引きこもっている人が中年世代に結構いるというようなことが明るみになっていった時に、どうしていくのかを考えていく必要があると思います。家族が当事者を養っていたとしても家族がいなくなってしまった時に誰が支えていくのかと考えると対象者を把握しておく必要があるのだらうと感じます。個人情報の問題があり、実際の現状が見えないケースは多いと思います。ご近所付き合いが盛んで、日常的に誰かの家でご飯を食べたりするようなことが以前はあったと思うのですが、今は聞かなくなってしまった気がします。
後藤委員	ありがとうございます。つづきまして、宇賀神委員お願いします。
宇賀神委員	<p>私は、レスパイトケアの話をしたと思います。高齢者の方と関わったその先に家族の状態もわかったりするということです。5080問題や4070問題など聞いたりしますが、母とか父である高齢の方と面識が繋がったところから、その先の家族に繋がり、家族の問題や課題について、助けているうちに、見えてくる関係性が出てくると思っています。私の行っているラジオ体操もそうですが、認知症のお母さんと一緒に来て、母と息子、別々の人と話をし、二人とも気持ちよく帰れるということもあると思います。例えば介護が必要な母がいて、介護が家の中で完了してしまうと社会から閉ざされ、その後、母が亡くなってしまうと、その子どもがどこにも繋がらないまま孤立してしまうといった例です。</p> <p>また、以前持ち寄りご飯の会をした際に、ラジオ体操には来ない多くの方に参加いただいて驚いたことがあります。「お弁当もう出来合いのものでいい」「コンビニで買ってもいいしインスタントのものでいいから一緒に食べたい」と言って、開催したのですが、「普段他の活動には出てこないけどご飯は一緒に食べたいから月1回やってほしい」といった感じで要望をいただきました。食事は同じ釜の飯を食べるではないですが、少し心がほぐれるのかなと感じました。その時に気軽にこんなものに困ったなど話してもらえると、あまり重たくならず、課題等もキャッチしていけるのではと感じます。</p> <p>今ラジオ体操の活動は4割男性なのですが、お一人介護のことで孤立された方がいました。</p>

発言者等	発言要旨
	<p>その方を支えていた人が来なくなってしまったときに他の男の人たちがその男性を支えるために「行った方がいいかな」みたいな感じで来てくれたことがありました。自分が自己選択して行動を決めることができる場所であれば、失敗しても許される、許容できるという間柄というのは、何回も会っていることで、心理的なバリアが落ちるのかなと思います。そういう間柄を作ると本人もSOSを出しやすい空気づくりが出来ていくのかなと思います。</p>
西委員	<p>引きこもっている人達をどう外に出すのかを考えた時に、社会的な遭難と僕達はどうなのですが、引きこもっている人だとしても、必ずスーパーに行ったり、郵便局に行ったり、生活活動しているはずなのですが、今の都会のような人が多い場所においては、その人がその場所にいたとしても現状の社会の希薄さ故、見えない状態になってしまっていることを考えるべきだと思います。見えないといっても、本当はそこに存在しているはずなので、見る人が見れば見える。例えばそのスーパーの店員だとか郵便職員など、そういう方々がその人を少し気にかけて、何かアクションを起こすことができれば、つながりを持てていくのだと思います。</p> <p>事例で言うと、私の活動を行っている建物にカフェが併設されていて、そのカフェに毎日その80代の男性がコーヒーを買いに来ていました。その方が、いわゆるフレイル状態でフラフラしていて、カフェの店員さんが話しかけると、介護保険も使っておらず、関わりを持ちたがらない方だったようで、暮らしの保健室のスタッフにそのカフェの店長さんから一緒にサポートしてほしいと相談があり、サポートすることになりました。「一緒に月に1回コーヒー飲みましょう」と活動に誘って来てくれるようになったのです。最初は、「介護保険なんかいらぬ。繋がりも必要ない」みたいな感じでしたが、その繋がりを2年間ぐらい続けると、「なんかそろそろそういうサービスみたいな使ってみようかなと思うのだけど、なんか紹介してくれないか」という話になり、支援につながりました。さらにその先の展開があって、そのカフェの店長さんが「毎日コーヒーを買いに来るのに、この3日間、姿が見えないので、見に行ってもいい」と相談をしてきたときがありました。実際見に行くと、やはり家の中で倒れていて、救急車を呼び、家族に連絡もして、一命を取り留めたということがあり、もしコーヒーショップの店員に繋がってなければ、コーヒーショップの店員さんが僕らに相談をしなければ、その人は家中で一人死んでいたという状況だったわけです。なので、街の中に引っ張り出すことが出来なくても、生活の動線上で繋がることはできるのかなと思います。</p> <p>図書館とコマダ珈琲は高齢者が多いと聞いているのですが、例えば、朝のコマダコーヒーを飲む高齢者と僕らが繋がったらあそこでもっと面白いことが起きるのではないかなと。</p> <p>先ほど話にもありましたが、情報が適切に届いていないイベントや取組もあると思います。こういった形でその適切な人に適切な情報を届けていくのか、その設計を考えていく必要があると思います。活動者も考えねばと思いますし、それにたけた方々をお呼びして、広報等の戦略を考えるとといったことも選択肢の一つかなと思います。</p>
後藤委員	<p>ありがとうございます。つづきまして、大平委員お願いします。</p>
大平委員	<p>アートを通じた地域の交流、社会活動ということで書かせていただき、事例として、自分のやっている取組を紹介したいと思います。</p> <p>11月に「みんなの川崎祭」というイベントの中で、グランツリーの無印さんで集めている使わなくなったプラスチックケースを何か活かせないかということで、障害のあるアーティストたちに色を付けてもらったものをベースで用意して、その場に来たこどもたちにさらにそこに絵をつけ足してもらって再利用する取り組みを行うつもりです。今区役所にある「なかはらっぱまつり」の看板も、葉っぱの形をスタジオフラットのアーティストが書いて、イベントに来たこども達が葉っぱの形に切り取って貼ったりして作成したものです。自分の作っ</p>

発言者等	発言要旨
	たものを見に来れたり、作ったものを発表する場があったり、そういうものでも繋がりが持てるのではと思います。
西委員	今の大平委員のアートフォーオールの話について、川崎市の取組の一つだと思います。アートを活用して、街の人たちを含め誰でもが表現活動を通じて、町中に参加していこうという取組は私もとても興味があり、市民文化局と一緒に進めようと思っています。
後藤委員	<p>大平委員、西委員ありがとうございます。アートは肩書き学歴年齢の年収の高さと関係ないところで自分が表現できるものですし、取組やすさはあるかもしれません。自分で自分を表現できる場所が地域の中にあるというのは大事なことなのだと思います。</p> <p>私はエイジング・イン・プレイスという言葉を書かせていただきました。以前に川崎市長がエイジング・イン・プレイスという言葉が使われていて、地域包括推進は総合計画に紐づいている取組の一つではあるが、住民同士のつながりづくりは果たして役所の業務なのかと考えた時に、人と人が繋がるというのは、個人でできるものではあるが、できない現状があるから市で取り組むという整理なのでしょうか。川崎市として取り組むといった以上は、誰がどこまで何をするかを決める必要があると思います。例えば保健師が何をどこまでやれるのか、包括の委託業務の中にどれだけ繋がり作りの業務があり、どこまでやる必要があるのか。そういう部分が意外と宙に浮き、みんなの善意で取り組んでいるのが現状だと思います。例えば、地域の人たちが少し地域で集まって話そうと思った時に区の人には誰か来てくれるのでしょうか。情報共有はするのだけれども、少し役割が変わると、他の部署は知りませんという状況になってしまう。</p> <p>関係者同士で情報公開はしっかりやるということや対面で会える機会を増やす、情報のアクセスを様々なチャンネルからできるようになど、本日アイデアとして出たと思いますが、では情報が伝わったとして、その取組につないでくれる人、「コーディネーター人材」と私は書きましたが、それを川崎市としてはどう業務として取り組んでいくのか。業務として取組めないから、お金を出すのか。市民の志で市民が取り組んでいく問題なのか。誰がどうやって実現するのみたいな部分をもう少し考えていくべきだと思います。</p>
川島所長	私たち職員としても、業務には取り組んでおりますが、区役所の中にと、地域の現状が分かっていないところがあると思います。まずは昨年、その課題をきっかけに地域に出ていく取組を行いました。そもそもつながりというのはやはり、そこにいる人たちの間で発生していくものであって、無理やり繋いでいくというのは、今日の話でもありましたが課題が色々あると考えています。保健師も専門職も数が足りない中でどう取り組んでいくか考えた時に、やはり地域の皆さんと一緒に作っていくしかないのかなと思っており、ここまでの業務でここまでは委託でという線引きはなかなか難しいのですが、できる限り地域の資源を掘り起こしつつ、情報で皆さんに提供しながら、活動を広げていくというようなところと一緒に取り組んでいきたいと考えています。どうかご支援いただけたらと思います。
後藤委員	石井委員の発言にもありましたが、閉じこもりがちな人の解像度を上げる作業を地域と行政側で行うべきだと思います。議題2については時間の関係もありますので以上としたいと思います。続きまして議題3その他について、何かありますでしょうか。
星野係長	<ul style="list-style-type: none"> ・第8期中原区地域福祉計画について、同じように冊子化するか市として検討中。また、方向性がまとまり次第、この場で報告する。 ・次回の本会議については、年明け2月に開催予定。再度通知する、旨を説明。
後藤委員	議題は以上になります。事務局にお戻ししたいと思います。
川島所長	閉会の挨拶

閉会